

今回は、「動詞」の続きから入ります。

動詞に関しては、まだ何点か触れておかなければなりません。その第一は、活用行の判断についてです。ア行、ヤ行、ワ行は混乱しやすいので、注意が必要です。この点に関しては、鉄則があるので押さえて下さい。すなわち、

**ア行で活用する動詞は「得」一語である**

ということです（例外はありますが、高校生には必要ありません）。これさえ理解していれば、混乱は防げるはずで、例をあげてみましょう。

例文 ①老いたる者、矢を②射たるに、人の③植うる柿の木に当たれり。

ここにはア行で活用する動詞は一語もありません。なにしろ、ア行で活用する動詞は、「得」一語なのですから。では、何行か。解答を記しましょう。

解答 ①ヤ行上二段 ②ヤ行上一段 ③ワ行下二段

説明するまでもないと思いますが、念のため。「老い」の「い」はア行ではないとすると、「やいゆえよ」の「い」しかない。「射（い）」も同じこと。「植うる」の「う」もア行でないとすれば、「わあうゑを」の「う」しかない。それだけのことです。

ちなみに、ヤ行上二段は「老<sup>お</sup>ゆ」「悔<sup>く</sup>ゆ」「報<sup>むく</sup>ゆ」の三語だけ、ワ行下二段は「植<sup>う</sup>う」「飢<sup>う</sup>う」「据<sup>す</sup>う」の三語だけに限定されるので、覚えておきましょう。

さて、第二の注意点。次にあげる動詞は、活用の種類を間違えやすいので、独立して押さえる必要があります。

「恋<sup>こ</sup>ふ」「恨<sup>うら</sup>む」

活用の種類がわかるでしょうか。前回の講座で説明した手順に従って、考えてみましょう。

まず、所属動詞を覚えておくべき活用の種類を確認する。上一段＝「きみにいひみゑる」、下一段＝「蹴る」、カ変＝「来」、サ変＝「す」「おはす」、ナ変＝「死ぬ」「往ぬ」、ラ変＝「あり」「をり」「はべり」「いまそかり」。この中にはありませんね。ならば、先にあげた二つの動詞は、四段・上二段・下二段のいずれかということになります。その判定は、「ず」を付けることによって行うわけですが、ここで問題が生じます。「ず」を付けた形を記してみましょう。

「恋<sup>こ</sup>ひ・ず」「恨<sup>うら</sup>み・ず」

こうなります。現代語の語感と少し違いますね。それで混乱するのです。しかし、このような動詞は他にはそうありませんから、まずこの二つは別に覚えておきましょう。念のため、この二つの活用の種類を記しておきます。

「恋<sup>こ</sup>ふ」＝ハ行上二段、「恨<sup>うら</sup>む」＝マ行上二段

また、次に挙げる三つは、一文字の動詞で、混乱しがちですから、まとめておいた方がいいでしょう。

「得」 = ア行下二段、「経」 = ハ行下二段、「寝」 = ナ行下二段

次に、第三の注意点。動詞の中には、二つの異なる活用の種類をもつものがあります。そして、活用の種類によって意味が異なるのです。その代表的な二例だけ、とりあえず押さえておいて下さい。

「頼む」

- ・四 段 → 「たよりにする」
- ・下二段 → 「たよりにさせる」

「給ふ」

- ・四 段 → 「尊敬」の動詞・補助動詞
- ・下二段 → 「謙讓」の補助動詞（会話文や手紙のみ、訳は「～です、ます」）

「給ふ」については、敬語を解説する際に詳しく見ていきますので、とりあえず、二つの活用の種類があるのだ、ということだけ押さえて下さい。

最後に、動詞の音便を確認しておきましょう。四段・ナ変・ラ変の動詞は、その連用形において、活用語尾が「い・う・ん・つ」に変化することがあります。これらをそれぞれ、「イ音便」「ウ音便」「撥（はつ）音便」「促（そく）音便」と呼びます。

また、ラ変動詞では、連体形が撥音便になることがあります。

音便において重要なのは、音便の四つの種類と、それらが連用形の活用語尾が変化したもの（例外は、ラ変動詞の連体形が撥音便になったもの）である、ということだけです。例を挙げておきます。

〈例〉

[連用形]

イ音便・書いて → 書いて  
ウ音便・歌ひて → 歌うて  
撥音便・死にて → 死んで  
促音便・ありて → あつて

[連体形]

撥音便・あるなり → あんなり

※ラ変動詞と同じ活用をするものに、形容詞カリ活用、形容動詞、「なり」などの助動詞があります。これらの連体形も撥音便になることがあります。

また、ラ変型活用の撥音便が無表記（文字化されないこと）になる場合があります。これは、「ん」という文字が生まれたのが、おおむね中世以降であったためと考えられます。

〈例〉 海月のなくらげなり → 海月のなンなり 〈「ン」が表記されていない〉

では、ここまで述べてきたことをまとめておきましょう。

1 ア行で活用する動詞は、「得」一語である。

(念のため)

ア行下二段活用 = 「得」

ヤ行上二段活用 = 「老ゆ」「悔ゆ」「報ゆ」

ワ行下二段活用 = 「植う」「飢う」「据う」

2 活用の種類を注意する動詞

「恋ゆ」 = ヤ行上二段活用

「恨む」 = マ行上二段活用

3 一文字の動詞

例語	活用の種類	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
得	ア行下二段活用	○	え	え	う	うる	うれ	えよ
寝	ナ行下二段活用	○	ね	ね	ぬ	ぬる	ぬれ	ねよ
経	ハ行下二段活用	○	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へよ

4 活用の種類が二つある動詞

「頼む」 = 四段 → 「たよりにする」

下二段 → 「たよりにさせる」

「給ふ」 = 四段 → 尊敬語

下二段 → 謙讓語

5 動詞の音便

種類 = イ音便(い)・ウ音便(う)・撥音便(ん)・促音便(っ)

音便は四段・ナ変・ラ変の連用形の活用語尾

例外は、ラ変型活用の連体形 → 撥音便(無表記になることがある)

※補足

念のため、二点ほど補足しておきます。

まず一点目。同音異義語の動詞があるので、典型的なものを挙げておきます。

- 「きる」 = 「着る」(カ行上一段)、「切る」(ラ行四段)  
「いる」 = 「射る」「鑄る」(ヤ行上一段)、「入る」(ラ行四段)

次に、二点目。知覚動詞などでは、上代に使われた助動詞の「ゆ」と融合して、別の動詞になったものがあります。また、助動詞「す」と融合したものもあります。典型的なものを挙げておきます。

・「見る」系動詞

- 「見る」(マ行上一段)・・「見る」の意  
「見ゆ」(ヤ行下二段)・・「見える」の意  
「見す」(サ行下二段)・・「見せる」の意

・「聞く」系動詞

- 「聞く」(カ行四段)・・「聞く」の意  
「聞こゆ」(ヤ行下二段)・・「聞こえる」の意

・「思ふ」系動詞

- 「思ふ」(ハ行四段)・・「思う」の意。  
「思<sup>おも</sup>ほゆ」「覚<sup>おぼ</sup>ゆ」(ヤ行下二段)・・「思われる」の意

今回はここまでです。以下の練習問題をやってみてください。

練習1 次にあげる動詞の活用の種類を記せ。

- ①矢を射たり。( )  
②恨みざりけり。( )  
③手づから植うる梅。( )  
④あやまちを悔いてけり。( )  
⑤美しうてゐたり。( )

練習2 次の傍線部の語を文法的に説明せよ。

- 例 足うち折つて ( 動詞・ラ行四段活用・連用形・促音便 )  
①中にて転んで落ち ( )  
②重きものを抱いたりして ( )  
③おろかならぬ人々にこそあめれ ( )

練習1・解答

- ①ヤ行上一段活用      ②マ行上二段活用      ③ワ行下二段活用      ④ヤ行上二段活用  
⑤ワ行上一段活用

練習 2 ・ 解答

- ① 動詞 ・ バ行四段活用 ・ 連用形 ・ 撥音便
- ② 動詞 ・ カ行四段活用 ・ 連用形 ・ イ音便
- ③ 動詞 ・ ラ行変格活用 ・ 連体形 ・ 撥音便 ・ 無表記

以下に前回の復習問題の解答と解説を載せておきますので、参照してください。

復習問題 1 ・ 解答

一	①	エ	②	ウ	④	ア	⑦	コ	⑨	キ
二	③	動詞 ・ ヤ行下二段 ・ 連体形				⑤	動詞 ・ ア行下二段 ・ 連体形			
	⑧	動詞 ・ ワ行上一段 ・ 連用形				⑩	動詞 ・ ラ行四段 ・ 連用形			
	⑪	動詞 ・ ナ行上一段 ・ 連用形								
三	⑥	ウカコ				⑬	アコカ			
四	ア	今日は波よ、立たないでおくれ。								
	イ	まったく見ない。								
	ウ	夜が更けて、しだいに涼しい風が吹いた。								

解説

一 ①感動詞は、現代語訳すると「ああ」とか「まあ」とかなるものです。②自立語・活用なし。何に掛かっているか考えましょう。④「ほど」＝「程度」⑦接続助詞です。⑨終止形は「いはけなし」です。

二 ③「おぼえーず」となり、下二段。⑤唯一のア行で活用する動詞です。⑧終止形は「みる」、覚えておく動詞です。⑩「とまらーず」となって、四段。⑪終止形は「似る」、これも覚えておく動詞です。

三 ⑥「常に・聞こゆる・を」となります。⑬「涙・ぞ・落つる」となります。この問題に限らず、動詞の末尾を助動詞と勘違いしないよう注意して下さい。とりあえず、練習段階では動詞の活用表を作って確認することです。最初は面倒ですが、慣れて来ると瞬時に頭の中でできるようになります。

四 アー「な～そ」の形です。とても重要です。イー「さらに～ず」、呼応の副詞です。ウー「やや」に注意しましょう。これは「やうやう」がつつまった形で、「だんだんと、しだいに」と訳します。

## 現代語訳

尼君は、「なんと、まあ幼いこと。どうしようもなくていらっしゃいますね。私が、このように今日明日と思われる命であるのを、なんともお思いにならないで、すずめを慕いなさることですよ。罪を得ることだと、いつも申し上げているのに、情けないこと」と言って、「こちらへ」と言うと、(女の子は)膝をついて座った。顔つきはたいそうかわいらしくて、眉のあたりがけぶるようで、あどけなく髪をかきやった額のあたりや、髪の様子が、ほんとうに可憐である。成長してゆく様子を見てみたい人だなど、(源氏は)目をおとめになる。それというのも、この上なくお慕い申し上げる人に、たいそうよく似申し上げているので、自然と見守られるのだなあ、と思うにつけても、涙が落ちる。

※復習問題1の補強プリントを以下に掲載します。基礎事項をしっかり身につけたい人はやってみてください。解答は次回に掲載します。

## 補強問題1A (品詞)

1 次の単語の品詞を、以下の選択肢か選んで、記号で記せ。

- ①受く    ②されど    ③かかる    ④なし    ⑤さらに    ⑥あな  
⑦しのぶ草    ⑧こそ    ⑨恐ろしげなり    ⑩けり

### 選択肢

- ア 名詞    イ 連体詞    ウ 副詞    エ 接続詞    オ 感動詞  
カ 動詞    キ 形容詞    ク 形容動詞    ケ 助動詞    コ 助詞

2 次の傍線部の語の品詞を、1の選択肢から選んで、記号で記せ。

よろづのことは、月見るにこそ①慰むものなれ。②ある人の、「月ばかり③おもしろきものはあらじ」と言ひしに、④またひとり、「露こそ⑤あはれなれ」とあらそひしこそをかしけれ。折にふれ⑥ば、⑦何かはあはれならざら⑧ん。月花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだけて⑨清く流るる水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。「沅・湘日夜東に流れ去る。愁人のためにとどまること⑩しばらくもせず」と言へる詩をば見はべりしこそあはれなりしか。

- 1 ① ( )    ② ( )    ③ ( )    ④ ( )    ⑤ ( )  
⑥ ( )    ⑦ ( )    ⑧ ( )    ⑨ ( )    ⑩ ( )

- 2 ① ( )    ② ( )    ③ ( )    ④ ( )    ⑤ ( )  
⑥ ( )    ⑦ ( )    ⑧ ( )    ⑨ ( )    ⑩ ( )

